

# 「燈花婆婆」話本考

堀

誠

一

『平妖傳』四十回本は、羅貫中の編次という二十回本に馮夢龍（一五七四—一六四六）の増補改作の筆が加えられて、新生躍如した章回小説である。全文新稿になる第一回の冒頭には、獼猴の怪にまつわる、いわば話本の入話に相當する故事を冠している。これが現存する「燈花婆婆」の故事である。

「燈花婆婆」は、晁琛（明・嘉靖年間の人）の『寶文堂書目』卷中「子雜」部、および錢曾（一六二九—一七〇一）の『也是園書目』卷十「戲曲小説」部「宋人詞話」に著録されている。兩書目のほか、明末の人が著した筆記隨筆の類には、次のような記載が見出せる。

○李日華『味水軒日記』萬曆四十三年十一月二十二日の條

從沈景倩借得燈花婆婆小説。閱之。乃鶯脰湖中一老獼猴

精也。宋咸淳中攪震澤劉諫議家。遇龍樹菩薩降滅。

李日華（一五六五—一六三五）は沈德符（字は景倩、一五七八—一六四二）が藏していたと思われる「燈花婆婆」を借覽したこと、またその内容についても書き記している。

○錢希言『桐薪』卷二「燈花婆婆」

宋人燈花婆婆詞話甚奇。然本於段文昌諾臯記兩段說中來。前段劉續中妻病。有三尺白首婦人自燈影中出。而後段則取龍興寺僧智圓事。闌入成文。非漫然架空而造者。

錢希言（明・萬曆四十年ころ在世）は「燈花婆婆」を「甚奇」と評し、且つそれが據り所としたという話を指摘して、架空の所産でないことを説いている。

『桐薪』には、別にもう一條、「燈花婆婆」に關わる記事が見えている。

○『桐薪』卷三「公赤」

簾管腔中有公赤。不知何義。考之。宋朝詞話有燈花婆婆。第一廻載本朝皇宋出了三絕。第一絕是理會五凡公赤上底。後排出幾箇詞客。蘇子瞻周美成凡十六人。

錢希言は簾管腔の「公赤」<sup>(3)</sup>について考えようとして、「燈花婆婆」に言及している。この記事からは、「燈花婆婆」の冒頭の段落には詩詞が付帶していたものと考えられる。

上記資料の中で「宋人詞話」に分類され、「小説」「宋人詞話」「宋朝詞話」と呼稱されていることに依れば、「燈花婆婆」は、その當時、一篇の話本の體裁でも存在していたと見られる。また、『水滸傳』百回本版本の一つである天都外臣序本の「水滸傳敍」<sup>(4)</sup>（末尾に「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」とある。天都外臣は汪道昆の託名）には、

故老傳聞。洪武初。越人羅氏。談詭多智。爲此書。共一百回。各以妖異之語引於其首。以爲之艷。嘉靖時。郭武定重刻其書。削去致語。獨存本傳。余猶及見燈花婆婆數種。極其蒜酪。餘皆散佚。既已可恨。

と見える。汪道昆はなおも「燈花婆婆」を見るに及んだとい

うが、それは、郭武定侯（郭勛）が『水滸傳』を重刻した際に削除した「致語」で、本来「本傳」の前にあったものであると考えられる。しかし、彼が見るに及んだ「燈花婆婆」は、やはり『水滸傳』から離れた體裁のものであったろう。『水滸傳』百二十回本の「發凡」第六條<sup>(5)</sup>にも、

古本有羅氏致語。相傳燈花婆婆事。既不可復見。

と見えている。

すでに、『水滸傳』に「致語」はなく、一篇の話本の體裁での「燈花婆婆」も現存してはいない。「燈花婆婆」は唯一『平妖傳』四十回本の第一回の冒頭に傳わるのみであり、中國小説史の脱落した部分を補綴する貴重な資料としての意味をもっている。首尾ととのったこの故事は、『平妖傳』四十回本の第一回から切り離してしまえば、小規模ではあるが一つの話本と見做し得る。そこでこの故事を、「燈花婆婆」の現存話本、あるいは單に、現存話本と呼ぶ。

本稿では、「燈花婆婆」の話本内容に焦點を絞り、現存話本に依據して、その話本生成について考察を加えることにする。考察においては、はじめに、現存話本の内容と李日華『味水軒日記』の記載に見える「燈花婆婆」の大概とを對比検討し、話本生成に關する一つの問題を提出する。次いで、

錢希言『桐薪』の「燈花婆婆」の條に見える指摘に沿って、具體的に「燈花婆婆」の話本生成の様相を探り、そこに明らかになった諸點をふまえて、新たな視點からさらに論究していくことにする。

## 二

『平妖傳』四十回本の第一回から「燈花婆婆」の現存話本を、〔I〕から〔V〕に分段して引用しておく。

その第一回は、

生生化本無涯。但是含情總一家。  
不信精靈能變幻。旋風吹起活燈花。

という七言四句の標題詩に始まる。

〔I〕 話說大唐開元年間。鎮澤地方。有箇劉直卿官人。曾做諫議大夫。因上文字。打宰相李林甫不中。棄職家居。夫人曾勸丈夫莫要多口。到此未免搶白幾句。那官人是箇正直男子。如何肯伏氣。爲此言語往來上。夫人心中不樂。害成一病。請醫調治。三好兩歎。不能痊可。

このような時代、場所、人物、情況の設定がなされ、いよいよ奇怪な事件へと發展していく。

〔II〕 忽一日夜間。夫人坐在牀上。喫了幾口粥湯。喚養娘

收過粥碗。兄見銀燈昏暗。養娘道。夫人且喜好箇大燈

花。夫人道。我有甚喜事。且與我剔去則箇。落得眼前明

亮。心上也覺爽快。養娘向前。將兩指拈起燈杖。打一

剔。剔下紅燄燄的燈花盞兒。落在卓上。就燈背後起陣冷

風。吹得那燈花左旋右轉。如一粒火珠相似。養娘笑道。

夫人好耍子。燈花兒活了。說猶未了。兄見那燈花三四

旋。旋得像碗兒般大一箇火毬。滾下地來。咕的一響。如

爆竹之聲。那燈花爆開。散作火星滿地。登時不見了。只

見三尺來長一箇老婆婆。

燈花（丁子頭）が破裂し、正體不明の老婆が突如出現するに至る内容が展開している。

〔III〕 向着夫人叫萬福。老媳婦聞知夫人貴恙。有服仙藥在這里。與夫人喫。那夫人初時也驚怕。聞他說出恁樣話來。認做神仙變現。反生歡喜。正是藥醫不死病。佛度有緣人。當時喫了他藥。雖然病得痊可。後來這婆子纏住了夫人。要做箇親戚往來。

老婆は仙藥で劉夫人の病氣を治すが、その後劉家の煩いの種類となる。

〔IV〕 擡着一乘四人轎。前呼後擁。時常來家咕噪。遣又遣他不去。慢又慢他不得。若有人一句話兒拗着他。他把手

一招。其人便撲然倒地。不知甚麼法兒。血漉漉一副心肝。早被他擎在手中。直待衆人苦苦哀求。把心肝望空一撇。自然向那死人的口中溜下去。那死人便得甦醒。奇怪な出現に加えて、心肝取りという奇怪な術を弄する老婆について語られている。話はいよいよ解決に向けて展開していく。

〔V〕 因此一件怕人。劉諫議合家煩惱。私下遣人蹤跡他住處。却見他鑽入鴛鴦湖水底下去了。你想鴛鴦湖是甚麼樣水。那水底下怎立得家。必然是箇妖怪。屢請法官書符念呪。都禁他不得。反喫了虧。直待南林菴老僧請出一位揭諦尊神。布了天羅地網。遣神將擒來。現其本形。乃三尺長一箇多年作怪的獼猴。那揭諦名爲龍樹王菩薩。劉諫議平時供養這尊神道。極其志誠。所以今日特來救護斬妖絕患。

厭勝された老婆の正體を長年怪異をなしていた獼猴、それを厭勝した揭諦尊神を龍樹王菩薩と明かして、厭勝にまつわる因縁が説かれている。續いて「詩曰」として、

人家切莫畜獼猴。野性奔馳不可收。

莫說燈花成怪異。尋常耐是淫偷。

という七言四句の詩で結ばれている。

引用した部分(標題詩をも含めて、總字數七一二字)が、「燈花婆婆」の現存話本である。一言しておけば、現存話本には、錢希言『桐薪』の「公赤」の條から知り得るところの詩詞は見えていない。

さて、李日華が『味水軒日記』に記載している「燈花婆婆」の大概と、現存話本の内容とを検討してみる。李日華の記載に見える鴛鴦湖(太湖に近接する湖水)の老獼猴の精とは、現存話本から知り得る所の、老婆に變身して怪異をなしていた身の丈三尺の獼猴のことを指し、震澤(江蘇省吳江縣。現存話本に見える鎮澤の別稱)の劉諫議家を攪亂したとは、現存話本の〔I〕から〔V〕に當たる部分を、龍樹菩薩(現存話本では龍樹王菩薩とする)に遇つて降滅したとは、現存話本の〔V〕に當たる部分を、それぞれ概括したものと考えられる。しかし、李日華の記載と現存話本との間には、齟齬することがある。それは時代設定についてである。李日華が沈德符から借覽した「燈花婆婆」は宋の咸淳年間に、現存話本は唐の開元年間に時代を設定しており、兩者の設定は全く異なっているのである。この時代設定の相異からは、「燈花婆婆」の生成成立に關わる問題が生じてくる。ここでは指摘するにとどめて、『桐薪』の「燈花婆婆」の條に見える指摘に沿った

考察をふまえて、改めて取り擧げることにする。

### 三

話本の中には本事來源の明らかになるものがある。「燈花婆婆」の場合、錢希言「桐薪」卷二「燈花婆婆」に依ると、その前段は唐・段成式（字は文昌）の『酉陽雜俎』前集卷十五「諾臯記下」に所收の劉積中の話（以下「劉積中」と記す）、後段は同書前集卷十四「諾臯記上」に所載の智圓の話（以下「智圓」と記す）を據り所にした話本と見られる。その所説に沿って、「燈花婆婆」の話本生成について考えてみる。

まず前段の據り所となったという「劉積中」を取り上げる。引用に際しては、現存話本の分段に對應させて〔1〕から〔5〕に區切り、話本の生成と密接に関わる部分は原文で、その他の部分は要約で記すことにする。

〔1〕 劉積中常於京近縣莊居。妻病重。

現存話本〔I〕に見える内容は、この部分を取り入れて、劉積中を劉直卿に改め場所も鎮澤に移していよう。また劉直卿が李林甫を彈劾して失敗するという、劉夫人が病いを得る原因を説く内容は、新たに設定されたものであろう。

〔2〕 於一夕劉未眠。忽有婦人白首。長纜三尺。自燈影中

出。

現存話本〔II〕にも見える詳密な内容は、このわずかな部分に基づき、燈影を燈花に改變して創り出されていることが明らかになる。錢希言は「燈花婆婆」の條において「前段劉積中妻病。有三尺白首婦人。自燈影中出。」と記すだけで、その記述はあたかも「劉積中」〔1〕〔2〕の部分のみが「燈花婆婆」に取りられたかの如き觀を與えるものである。以下の檢討から「劉積中」のそれ以後の内容も、「燈花婆婆」の生成に取り入れられていることが明らかになる。

〔3〕 謂劉曰。夫人病。唯我能理。何不祈我。劉素剛。咄之。姥徐戟手曰。勿悔勿悔。遂滅。妻因暴心痛。殆將卒。劉不得已祝之。言已復出。劉揖之坐。乃索茶一甌。向口如呪狀。顧命灌夫人。茶纜入口。痛愈。後時時輒出。家人亦不之懼。

この部分が現存話本〔III〕に見える内容に發展したのであろう。しかし「劉積中」〔2〕からこの部分にかけてはかなり改められ、老婆が夫人の前に出現し直ちに萬福の禮をとるといふ展開が創り出されたことと見られる。治療に用いられた茶は、仙藥に改められたことも明らかになる。これは、靈驗を効果的に説く設定と言えよう。

〔4〕 幾年かが過ぎて、老婆から笄年に達した娘の婿取りの件を頼まれた劉が、言われた通り桐木で人形を作っておくと、それは一晚のうちに消えていた。鋪公鋪母の役も頼まれ、ある日夫妻はしつらえられた車馬で王公の家の如き屋敷に連れて行かれた。二人は別々の部屋に通され、知り合いで存命の者と死亡している者數十人に會うが、お互い顔を見合わせるだけであった。五更になり恍惚としている間に家に歸り着いていたが、ほとんど記憶がなかった。數か月後老婆が再び現れ、成長した小女のことを託そうとした。たまりかねた劉が枕でうつと、老婆は姿を消した。と同時に、妻は病いを起こした。劉は祈り求めたが老婆は現れず、妻は死んでしまい、その上、劉の妹も心痛を病むことになった。

現存話本〔IV〕に見える内容にこの部分が發展したのではなからうか。「劉積中」〔3〕にも見える老婆が姿を消すと心痛を起こすという内容が、老婆の弄する心肝取りの術に改められているのであらう。

〔5〕 劉欲徒居。一切物膠着其處。輕若履屣。亦不可舉。迎道流上章。梵僧持呪。悉不禁。

現存話本〔V〕に見える道士の護符念呪では怪異を鎮めら

れないという部分は、これを改變したのであらう。

「劉積中」の結末は、

下女小碧が劉と同年及第の杜省躬の舉止口調で、わたくし杜省躬が泰山からの歸路に、君の妹の心肝を飛天夜叉から取り戻してきたといい、何ものかに命じて蠕々と動く物を安置させた。その後舊交をあたため嗚咽して別れると、小碧は急に倒れたが、やがて意識を回復した。かくて、劉の妹は事無きを得た。

という内容であって、「燈花婆婆」の話本生成には關與していないようである。ただ杜省躬が劉積中と同年及第とあるので、このことから劉直卿がかつて諫議大夫であったという設定が生み出されてきたのかも知れない。

現存話本のほぼ〔V〕の前半までが「劉積中」を據り所としているようである。では、その後の部分は「智圓」に依るのであらうか。「智圓」の梗概を記してみる。

鄭公が梁州に住んでいたころ、龍興寺に勅勒の術を善くする智圓という僧がいた。鄭公は彼のために草屋を建て、沙彌・行者と共に住ませた。數年してある婦人が、老母の病氣を神呪で治してほしいと再三頼むので、智圓は翌朝出向いたが、その家がわからず歸って來た。翌日再

び現れた婦人を責めると、智圓は臂を引っぱられて恍惚状態に陥り、婦人を刺殺してしまった。正氣に戻った後、殺した相手が沙彌と知って茫然自失、行者と共に死體を埋めてしまった。その日耕作に出ていた沙彌の両親は、早衣褐襖姿の見知らぬ者から沙彌が殺されたと告げられ、號泣しつつ智圓を訪ねた。死體を探し當て役所に訴え出たが、智圓は鄭公に七日間の猶豫を請い、沐浴して壇を設け術を行った。三日目、壇上に婦人が現れ、智圓が誓いをたてると、沙彌はある村の古い墓地にいと答えた。かくて癡人となった沙彌が発見され、その後智圓は佛語を口にしなくなった。

錢希言の「後段則取龍興寺僧智圓事。闖入成文。」という指摘をそれなりの理由のある見解と考えて、現存話本と検討してみる。「智圓」と現存話本には、佛教者の法力で怪異が除かれていること、怪をなした人物が女性であることに共通する点がある。これに依れば、「燈花婆婆」の南林菴の老僧が揭諦尊神を請い出して老婆の怪を鎮めたという内容は、勅勒の術を使う智圓が婦人による怪異をあばいたことを據り所に行っていることになる。そして、揭諦尊神は劉直卿が篤く信仰していた龍樹王菩薩であったという、加護功德を説く一節

を付加していると考えられる。しかし、現存話本の結末部分は筋書的な内容の展開にとどまるので、「劉積中」になし得たような具體性のある指摘は容易にできない。

現存話本と「劉積中」「智圓」との對比検討から、「燈花婆婆」の前段は、ほぼ「劉積中」の内容に依據して構成されていたことが明らかになる。しかし「劉積中」は骨格を形成する上で取り入れられたにすぎず、「燈花婆婆」はそこに本来具有されていた奇怪な内容を發展させ、怪異性豊かな話本内容を創造していたと考えられる。破裂した燈花からの老婆出現とその仙薬での治療、そして心肝取りの術という内容が、奇怪性を増幅していた跡を明らかに示している。

先に現存話本と李日華が借覽した「燈花婆婆」との間には、時代設定上の相異が認められることを指摘しておいたが、この点について上記の考察をふまえて考えてみる。兩者の時代設定の相異によれば、現存話本「I」に見える内容に異なりを生じていた、と推測される。唐の開元年間に時代を設定する現存話本では、劉直卿が宰相李林甫を彈劾したとしているが、宋の咸淳年間に時代を設定する李日華の借覽した「燈花婆婆」においては、劉直卿が彈劾した相手は唐の李林甫ではなかったと思われる。假に、「燈花婆婆」が本來李日

華が借覽した本の如く、宋の咸淳年間に時代を設定していたとすれば、現存話本の設定に對してはいかなる考え方ができるだろうか。現存話本は『平妖傳』四十回本に見えるところである。この四十回本は、宋の慶曆七年貝州に發動した王則の反亂を敷衍した二十回本を馮夢龍が增補改作したもので、その第一回は馮夢龍が新たに創作増補した章回到當たっている。このことから見れば、一連の増訂作業の中で、馮夢龍は「燈花婆婆」の内容を第一回に取り入れるとともに、その本來の時代設定を唐の開元年間に改竄し、あわせて時の宰相を李林甫に改めていたと考えられる。しかし「燈花婆婆」は、前段の生成においては、「劉積中」を據り所にして、いることが明らかである。『酉陽雜俎』に見える唐代の話に基づいて「燈花婆婆」は、據り所とした話の時代を受けて唐代に時代を設定し、唐代故事の話本として成立していたとも考えられる。それ故、現存話本は唐代故事としての設定を受け継いでいるとする見方も否めないものである。

現存話本と李日華が借覽した「燈花婆婆」に依る限りでは、少なくとも明末には、唐代故事と宋代故事の二つの「燈花婆婆」が存在したらしいと言える。「燈花婆婆」本來の設定は詳らかにならないが、このことは、話本の生成成立と内

容の變容に關わる重要な問題を内在している。現存話本と李日華が借覽した「燈花婆婆」との時代設定の相異は、單なる相異として看過できないものであると考える。

#### 四

現存する話本集の中には、數多くの靈怪ものの話本が傳わっている。靈怪ものの話本は、ある人間が怪異に巻き込まれていく過程と怪異の様相を中心にして展開していく部分、そして怪異が鎮められる過程と結末を展開する部分とから構成されている。その後段においては、道士佛僧が法力で怪異を鎮め、怪異をなしていたものの正體が明かされるという内容で構成されているものが、その多くを占めている。これは後段における一類の話柄と見做すことができる。この一類の話柄を有する話本の例としては、「西湖三塔記」「洛陽三怪記」(共に「清平山堂話本」)「崔衙内白鶴招妖」(『警世通言』第十九卷、「定山三怪」「新羅白鶴」とも稱される)「西山一窟鬼」(『京本通俗小説』第十二卷、「警世通言」第十四卷には「一窟鬼類道人除怪」と題して收載される)などが擧げられる。

現存話本の内容から見て、「燈花婆婆」は靈怪ものの類に屬し、後段にはその類の話本に見える一類の話柄をもつてい



るが、その中には前段においても似通った内容の展開で構成されている話本がある。それは、老婆が怪異に巻き込み、その一味が心肝取りを行い、道士が厭勝に當たり、神將が一味を擒縛し、かくて怪異をなしていたものの正體(動物)が明かされている「西湖三塔記」と「洛陽三怪記」である。

その前段に着目してみると、「燈花婆婆」「西湖三塔記」「洛陽三怪記」には心肝取りのことが見えていて、いずれも、これを行う人物の正體を動物であったと明かしている。このこととに依れば、心肝取りは動物の怪を示す要素の一つであったとも思われる。「燈花婆婆」の心肝取りは、「劉積中」に見える、老婆が消え失せるとにわかには心痛を起こすという内容が改められたものであることが明らかである。また、怪異に巻き込んでいく過程を見ると、「西湖三塔記」「洛陽三怪記」では、怪異のものが日常ごく自然な形で接近して、ある人間を怪異の渦中に引き込んでいく。これは廣く靈怪ものの話本に言い得ることで、「燈花婆婆」のように、怪異をもたらすものが突如奇怪な方法で出現するのは特異のようである。その部分には詳細な内容が展開しており、内容自體に妙味が見られる。この内容が「劉積中」「2」を據り所にし、燈影を燈花に改變して案出されていることはすでに明らかにした

が、ここで改めてこの内容を中心にして話本の生成について考察してみる。

燈花は、燈火が燃えはじける現象、あるいは丁子頭のことである。古來靈物と考えられており、燈花には「燈火華さけば錢財を得る」<sup>(10)</sup>、あるいは燈花生ずれば吉事喜事が到來するという俗信があった。すなわち、燈花は本邦における茶柱の如く、吉事喜事の訪れを報ずるもの、吉兆と信じられていたのである。また、この俗信があることに由来して、燈花ということばは、吉事喜事が現に起きた時に喜びを形容するのにも用いられていた。例えば『水滸傳』第二十二回、閻婆惜殺害の罪で追われる宋江が滄州横海郡の柴進を訪ねた場面で、宋江を助け起こした柴進の言ったことばである。<sup>(11)</sup>

昨夜燈花報。今早喜鵲噪。不想却是貴兄來。

これは、「乾鵲噪ぎて行人至る」<sup>(12)</sup>という俗信と結びついたものであるが、小説戯曲にはこのような用例が数多い。他の例を挙げるまでもなく、それらは燈花が現實に生じたか否かに關わらず、その喜びを表現するため、いわば常套的に用いられたものと考えられる。

「燈花婆婆」に見える燈花とは丁子頭のことであり、話本内容は、その吉兆としての意味に支えられているようである。

現存話本〔Ⅱ〕の中で、燈花を見た侍女は、喜び事があるうと豫測しているが、病床の劉夫人は、どんな喜び事が起きるのですかと答えている。そして侍女に掻き取られた燈花はやがて破裂し、その直後に正體不明の老婆が出現しているのである。この日常普段からは豫想のつかない怪事件の發生は、劉夫人が燈花の俗信に反することばを言わずに、また即座に燈花を掻き取らせなければ、起り得なかつたとさえ思われよう。燈花は本來吉兆であつたはずであるから、尙更のことである。ここでは、燈花の吉兆としての意味を逆手に取つて、老婆の意外な出現の内容を構築していることが明らかである。〔Ⅲ〕へ發展すると、老婆が劉夫人に仙藥を施して病いを治すと展開している。奇怪なる出現方法を除いてその藥餌のみを見れば、老婆の出現は、全く喜び事の到來であり、燈花の豫言が的中したとも思われる。燈花の意味は副次的にも作用しているのである。しかし後の展開からすれば、この喜びもかりそめのものであつたことは明らかである。吉兆の意味をもつ燈花は新たに取入れられるとともに、十二分に機能していると考えられる。「燈花婆婆」という話本名が、破裂した燈花から出現してかりそめの喜びをもたらし、後には怪事を引き起こした奇怪なる老婆を象徴していること

は言うまでもない。

「燈花婆婆」は「劉積中」を據り所にして、前段の骨格を形成していた。しかし燈影から怪異のものが出現するという内容は、「劉積中」のみが有していたものではなく、『酉陽雜俎』續集卷二「支諾臯記」中の姚司馬の話、『太平廣記』卷三七〇にも引かれる)や『宣室志』の陳越石の話、『太平廣記』卷三五七所收)などにも見えている。「燈花婆婆」が「劉積中」に依據しつつ、燈影を燈花に改變していたことは、燈影からの怪異出現という内容をもつ話の舊套を越えた、斬新な着想であつたと見られる。吉兆と信じられ、現に起きた吉事に對する喜びの表現にも用いられていた燈花を、現實の事態として話本に取り入れた「燈花婆婆」は、果してこの燈花を機軸にして不知不測の詳密な内容を案出し、「劉積中」に内在されていた奇怪な内容は、更に増幅されることになつたのである。「燈花婆婆」が燈花を用いたことは、話本の内容を多様化する意義深い發想であつたと考える。<sup>(13)</sup>

## 五

「燈花婆婆」の後段では、南林菴の老僧が揭諦尊神を請い出し、その揭諦尊神が遣わした神將が老婆を擒縛した後に、

老婆が身の丈三尺の獼猴であつたと明かしている。更には揭諦尊神が實は龍樹王菩薩であつたとも明かし、この菩薩の劉直卿に對する加護救難の一節を加えて結末づけている。この内容の展開は、さきに例示した靈怪ものの話本にも見えるところである。ここに明かされる獼猴と龍樹王菩薩は、話本生成の上で據り所とした話に基づかないで、新たに設定されたものと見られる。以下に、老婆の正體であつた獼猴と龍樹王菩薩について考察してみる。

老婆に變身していた身の丈三尺の獼猴は、野猿とは異質な存在である。しかも、南林菴の老僧が揭諦尊神を請い出すまで、道士の護符念呪では鎮められなかつたというから、その靈性は、明の小説『西遊記』第五十七、八回に登場する六耳獼猴に相似るものがある。この六耳獼猴は五仙五虫のいづれにも屬さない四猴混世の一種とされ、孫悟空に寸分たがわず變身して三藏一行を翻弄し、釋迦如來により正體が明かされて進退窮まつた獼猴である。六耳獼猴と「燈花婆婆」の獼猴とは、奥深い所で血脈を一にするかのようにも思われる。しかし「燈花婆婆」の獼猴は、水に住むという面妖な要素をもっているのである。というのは、その變身である老婆が鶯脰湖の中に入っていくからである。

「燈花婆婆」話本考(堀)

この獼猴の怪異を鎮めたのは、揭諦尊神、すなわち龍樹王菩薩である。揭諦尊神とは佛法を守護する神のことで、小説戯曲においては、釋迦如來らの命令一下、犯人逮捕に向かい天羅地網を張り廻らす役目を受け持つことがある。<sup>14)</sup>「燈花婆婆」では、この神を龍樹王菩薩として、劉直卿が信仰していたと説いている。「龍樹菩薩傳」<sup>15)</sup>に依れば、龍樹菩薩は佛滅後七百年南天竺に生まれ出家して後、靜處の水精房中で思惟していた時、大龍菩薩によって海中に連れて行かれ、水宮にて深奥の經典無量の妙法を傳授されたといひ、水と深い關係をもつようである。龍樹王菩薩の信仰については知り得なかつたが、信仰對象としてのそれはやはり水と關係をもつていたのであらうと思われる。鶯脰湖の獼猴はこの龍樹王菩薩によって鎮められたのである。また、道士の護符念呪で鎮められなかつたということに依れば、この獼猴は龍樹王菩薩によって鎮められる必然性があつたわけであり、兩者は密接不離の關係にあつたと考えられる。

水と深い關係を有する猿猴となれば、獼猴の如き姿をしている淮水渦河の神無支祁、花果山水簾洞を據地とする聖天大聖孫悟空に思い至る。その退治について見ると、無支祁は唐・李肇の『唐國史補』卷上「淮水無支奇」においては禹

に、『太平廣記』卷四六七に收載される「李湯」（『戎幕閑談』を引く。李公佐の作と考えられる）では治水する禹を助ける庚辰に制壓されたと見えている。この無支祁の傳説は、宋代に入ると、朱熹『楚辭辨證』卷下「天問」などに見えるように、僧伽が無支祁を、あるいは無支祁が轉化した水母を降したという傳承に轉變もしている。ここに現れた僧伽は、唐の龍朔年間に西域から訪れ尊崇を集めた僧であり、後に觀音應化身として信仰の對象となり、泗州大聖として治水救難の靈驗ありと信じられ、いつしか無支祁の傳説と結びついてきたのである。<sup>(16)</sup>『西遊記』第六十六回、小西天の妖怪黃眉大王の退治に手を焼く孫悟空が、その昔水母娘娘を降伏せしめ、近くは水猿大聖を退治している泗州大聖國王王菩薩に援助を求め、という一節がある。これは明らかに泗州大聖僧伽にまつわる傳承を反映したものであろう。一方、孫悟空の退治について見ると、『西遊記』第六回、天宮を擾亂した孫悟空は、その追討に新たに派遣された顯聖二郎眞君によって追いつめられ、太上老君が投げつけた金剛琢を腦天に受けたところを、二郎眞君の犬に咬みつかれて逮捕されている。これは二郎眞君が孫悟空を逮捕するという元刊本の内容が發展した形態であるが、孫悟空は最初に征伐に當たった托塔天王李靖

らの手では逮捕されず、二郎眞君が登場するに及んで退治されていることに注目したい。それは二郎眞君が水神であるからである。花果山水簾洞を據地とし水の精としての一面をもつ孫悟空は、水神である二郎眞君によって逮捕されるに至る必然性があつたと考えられる。この意味において、孫悟空と二郎眞君との結びつきは強いのである。

水との關係が深い無支祁と孫悟空の退治について眺めてみた。「燈花婆婆」の後段には、靈怪ものの他の話本にも見えるような筋が展開している。しかし、そこに明かされる老婆の正體である鶯脰湖の獼猴とそれを鎮めた龍樹王菩薩とは、退治の關係において密接不離であり、兩者無關係にして設定されたものではないと考えられる。獼猴の變身である老婆が鶯脰湖に入っていくという内容は、「燈花婆婆」が據り所とした話に見えていない。これは老婆が人間でないことを明確化する設定であるが、その正體であつた獼猴が鶯脰湖に住んでいたことをも説いていよう。

「燈花婆婆」は、鶯脰湖の獼猴が龍樹王菩薩によって鎮められたと結末づけられている水に住む獼猴の退治話であり、すでに見た水に關係深い所の猿猴の退治話の流れの中に位置していようと思われる。鶯脰湖の獼猴が龍樹王菩薩によって

こそ鎮められているという点では、孫悟空が二郎眞君の登場によって制壓されるに至るのと相通ずる要素があるろう。しかし「燈花婆婆」では、劉直卿が彌猴の怪を鎮めた龍樹王菩薩を信仰していたと説いている。このことから見ると、泗州大聖僧伽が現に信仰され、後には無支祁あるいは水母という水怪をなすものを退治したと傳承されていたことと、何らかの絡まりがあるろうと思われる。それは、信仰對象であった泗州大聖にまつわる傳承も轉變展開していったようであり、『西遊記』では泗州大聖國、土王菩薩と呼ぶに至っているからでもある。鶯脰湖の彌猴と龍樹王菩薩との結びつき、そして信仰を説くことから見ると、「燈花婆婆」の結末づけの内容は、話本の生成とその成立の時代に關わる問題を秘めているように思われる。

## 六

現存話本に依據して話本生成という観点から、「燈花婆婆」について考察してみた。「燈花婆婆」は一篇の話本の體裁では今日に傳わらず、その現存話本は、『平妖傳』四十回本第一次に見えるものである。『平妖傳』四十回本は馮夢龍の二十回本に對する増補改作の手を経て成り立ち、しかもその第

「燈花婆婆」話本考(堀)

一回は全文新稿になる章回の一つである。この点から見ると、第一回の創作増補に當たって、馮夢龍は萬曆ころに存在していた「燈花婆婆」に着目し、その冒頭に冠したものと考えられる。現存話本は「燈花婆婆」の「正文」に當たる内容を傳えていようが、馮夢龍の手を介している点、あるいはその規模の点から見ても、その大要であるのか否かは詳らかにしない。また「燈花婆婆」が「致語」として『水滸傳』古本の「本傳」の前にあつたという點に鑑みると、『平妖傳』四十回本でも第一回の本題の前に「燈花婆婆」を冠しているわけであり、それは「致語」の體裁を傳えるかの如く思われもする。「燈花婆婆」の現存話本をめぐっては、『平妖傳』四十回本における馮夢龍の増補改作の様相を探り、その創作上の問題という観点から考察することもできよう。この點については、改めて論じてみたい。

### 〔注〕

- (1) 『嘉業堂叢書』本(東洋文化研究所藏)に依る。この記事が見える卷七には「萬曆四十五年乙卯」と刻するが、干支・他卷との關係から、五は三の誤刻と考へて改めた。鄧文如『骨董續記』卷二「燈花婆婆」の條には「萬曆四十五年二十一日」として引かれている。

- (2) 『松樞十九山』本(内閣文庫藏)に依る。
- (3) 「公赤」については詳らかにし得なかつた。
- (4) 『水滸全傳』(人民文學出版社、一九五四年刊)に依る。
- (5) 『忠義水滸全書』(明刊本、内閣文庫藏)に依る。
- (6) 『天許齋批點北宋三遂平妖傳』(泰昌元年刊本、内閣文庫藏)に依る。
- (7) 『四部叢刊』本に依る。『太平廣記』卷三六三「妖怪五」には「劉積中」(引『西陽雜俎』)と題して收載される。
- (8) 郭立誠『中國生育禮俗考』第一章第六節「牀公牀母」に、「據我個人推想：唐人婚禮中的『鋪公鋪母』大概就和近代北方婚禮要請四位全福太太來縫新婚用的被褥，到婚禮前夕再請全福太太來鋪床一樣，不過是福壽双全多子多孫的老夫婦來鋪床，因此稱爲『鋪公鋪母』。」というのに依る。
- (9) 『四部叢刊』本に依る。『太平廣記』卷三六四「妖怪六」には「僧智圓」(引『西陽雜俎』)と題して收載される。
- (10) 『西京雜記』卷三、樊噲・陸賈の故事に「燈火華得錢財」とある。
- (11) (4) 掲書に依る。
- (12) (10) に記した故事に「乾鵲噪而行人至」とある。
- (13) 戴不凡「跋《燈草和尚》」(『小說見聞錄』所收)に、「書敘至正間楊官兒(知縣)家事。以楊娶繼室——汪千戶十五歲之女，又生女春姑，許配商人子李可白事爲經，以燈花中跳出三寸和尚化爲丈六金剛爲諱，所敘不出房幃，筆墨專乎枕席。」
- (14) (傍點筆者)と記されている。『燈草和尚』(未見)にも燈花から人間が出現する設定があるようである。また、苗族の民間故事に「燈花」(『龍牙顛顛釘滿天』所收)がある。
- (15) 『西遊記』第五回、天宮を擾亂した孫悟空の退治に派遣された天兵の中に五方揭諦がいること、「文殊菩薩降獅子」(『全明雜劇』所收)では文殊菩薩に率いられて四揭諦が嶧嶺山の青獅子を制壓するのに向いていることなどから考えられる。『西遊記』においては、五方揭諦は西天取經の三藏を蔭から守護する諸神の中にも加わっている。
- (16) 『大正新脩大藏經』第五十卷所收。
- (17) 黃之崗「巫支祁和僧伽」(『中國的水神』第十五章)、葉德均「無支祁傳說考」(『戲曲小說叢考』所收)、中野美代子「閉じこめられるサル」(『孫悟空の誕生』第二章第二節)、牧田諦亮「中國に於ける民俗佛教成立の一過程——泗州大聖・僧伽和尚について——」(『京都大學人文科學研究所創立二十五周年記念論文集』所載)などを参照した。